

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

大分市の南部に「植田」という地域があります。この地名は、平安末期12世紀の藤原頼長没官領29万所の一つ「豊後国植田荘」に起源があります。この荘園は、後白河上皇領から後鳥羽天皇領として継承され、承久の乱でいったん鎌倉幕府に没収されますが、1221（承久3）年に後堀河天皇領に返納される経緯をたどります。

1285（弘安8）年の「豊後国図田帳」によると、植田荘は名主の名を付した10の名（田畑の賦課単位）で構成されており、上義名と下大名は植田有秀が知行（支配）し、重国名は植田有綱の旧領地でした。鎌倉期の植田荘の多くは、その地の地頭職を持つ植田一族が在地領主だったことが分かります。

やがて室町時代になると、植田氏は豊後の戦国大名大友氏の家臣となります。例えば、植田惟美は1532（天文元）年に周防の大内軍と戦った豊前国

また、植田惟美の子の鎮貞も、大友義鎮（宗麟）から跡目安堵状を受けていることが、「植田文書」から分かります。末裔に伝わる大友氏歴代当主からの感状（軍事功労を称賛する手紙）や安堵状の存在に加えて、植田鎮貞の「鎮」の1字は、主君大友義鎮の偏諱（主君の名の1字を賜うこと）に他ならず、中世後期の植田氏が歴代

大友家の当主と主従関係を結んだ家臣として活動していたのは間違いありません。一方、植田氏にはもう一つ別の側面があります。

植田荘南部の靈山の中腹に、天台宗延暦寺派の古刹、飛来山靈山寺があります。寺は、南北朝期には多くの僧坊と衆徒を擁していましたが、1337（建武4）年に室町幕府將軍足利尊氏の弟直義は、植田有快に対して「豊後国植田荘靈山寺執行職」領知を認める下文（上位者からの手紙）を発給しています（「浅井文書」）。植田有快は、別の史料では「僧有快」と記しているため、靈山寺の僧侶でした。

やがて16世紀になると、大友義鎮は、靈山寺の「学頭職」も住職植田氏に安堵しています。これらのことから、中世の武士植田氏は、植田荘の地頭職を持つ在地領主から大友氏の家臣へと成長しながら、一方で、荘内の天台宗寺院靈山寺の寺務をつかさどる執行職や、修行、学問に励む僧侶たちを統括する学頭職として活動する僧職でもあったことが分かります。

（名古屋学院大学国際文化学部・教授）

11月1回掲載

植田一族

在地領主から家臣兼靈山寺住職へ



靈山の中腹に伽藍を有する靈山寺（大分市）